

## <博士論文概要>

### 中国における少数民族文化活動の展開に関する研究 —モンゴル族にみる民族文化と国民統合—

紅桂蘭\*

#### 1. 研究の目的

本研究は、中国における民族政策の展開を辿りながら、少数民族の文化（以下、民族文化）が多民族国家を統合する原理としていかなる作用を果たしているかを検討することを目的としている。つまり民族文化は、国民統合を図る手段として政治的に利用されながらも、同時に固有の民族文化を保存・継承しようという民族意識を涵養することにも作用している。その結果、中国の少数民族は国家意識と民族意識の両方を内在させた存在としてあることを明らかにしようとするものである。本研究は、中国のモンゴル族に焦点を当てて中国人としての国民意識とモンゴル族としての民族意識が、モンゴル文化を通じてどのように内面化されてきたのかについて、政治的、社会的な背景を踏まえながら、文化政策や文化活動の展開を跡付けることで考察した。その際に、分析の枠組みとして費孝通の多元一体構造論を参照しながら「中華民族」という操作概念と民族文化の関係性に着目して分析を進める。そして民族文化をめぐっては、文化芸術団体であるウランムチ芸術団体<sup>1</sup>とモンゴル族の伝統文化である「アンダイ」<sup>2</sup>文化を事例に、これらの文化を通じて国民統合としての「政治・政策の宣伝」と少数民族としての「民族文化の継承・普及」の役割が果たされてきたことを明らかにする。

#### 2. 研究課題と方法

以上の目的を明らかにするために、本研究では以下の3つの課題を設定する。

課題1：民族文化活動の展開と実態を国家レベル、地方レベル、民衆レベルの3つの層から分析し、「政治・政策の宣伝」と「民族文化の継承・普及」の実態を明らかにする。

国家レベルについては、建国から現在までの民族文化政策の展開を中央政府から出された各種の政策文書や共産党幹部らの発言などから明らかにする。地方レベルについては、国による民族文化政策を受けて、地方政府がどのような文化活動を展開してきたのかについて検討する。事例として、遊牧生活を行うモンゴル族に対してモンゴル文化の普及活動を担ってきた官制の

---

\* 筑波大学大学院博士後期課程教育基礎学専攻

文化芸術団体であるウランムチの活動を事例に、1957年の結成から現在までの活動の実態を解明する。民衆レベルについては、モンゴル族の伝統文化であるアンダイ文化を取り上げ、アンダイが継承される過程に見られる形態の変化について分析する。

課題2：アンダイ文化を事例に、伝統文化が時代によって形態を変化させながらも伝統の装いをまとめて定着が図られている実態を明らかにする。これにより民族文化継承の一端を示す。具体的には、新アンダイとして創作されたアンダイ体操が民族学校に導入され、学校教育を通じてアンダイ文化が普及し、定着していることを、民族学校での調査や、子どもたちへの伝統文化に関するアンケート調査などから明らかにする。

課題3：課題1・2の検討を通じて、多民族国家である中国の少数民族は、中国人としての国民意識をどのように獲得し、またモンゴル族としての民族意識といかに両立させているのかを、民族文化の観点から明らかにする。

### 3. 論文の概要

序章

第一章 中国における少数民族文化政策の展開

第二章 民族文化活動の展開—内モンゴルのウランムチを事例に—

第三章 モンゴル族のアンダイ文化の新たな創造の経緯と普及の過程

第四章 民族学校にアンダイ体操の導入

—クロン旗における民族学校のアンケート調査分析—

第五章 中華民族多元一体構造の中の少数民族文化の継承と教育的課題

終章 本研究のまとめと今後の課題

第一章では、中華人民共和国の建国から現在までの民族政策、とくに民族文化政策の展開を検討した。分析にあたっては、中国の大きな政治的、社会的変動の画期に基づき、以下の4時期に区分した。新中国成立期（1949年～1965年）、文化大革命期（1966年～1976年）、改革開放期（1977年～2001年）、グローバル時代（2002年～現在）における少数民族文化政策期である。そして各時期における民族文化政策の特徴とその背景にある国家の政策的意図を探った。そのうえで、中央政府が公式には民族文化を尊重し、保護、奨励、継承に向けた諸政策をとる一方で、その内容は政治宣伝など政府の意向が強く反映される形で改変が要請され、自由な文化活動が抑制されるなどの作用が働いていたことが明らかになった。つまり、中央政府による民族文化政策は「国民統合」と「民族文化の保護」という両義性をもって推進されてきたこと

が分かる。

第二章では、「国民統合」と「民族文化の保護」という両義性は、地方レベルにおいてどのように具体化され実施されていったのかについて、ウランムチの活動を事例に検討した。その際、第一章で設定した時期区分に沿って、ウランムチの草創期（1957～65年）、ウランムチの停止期（1966～76年）、ウランムチの回復・改革期（1978～2001年）、ウランムチのブランド化期（2002年～現在）に区分して、各期の活動を明らかにした。

草創期におけるウランムチの特徴としては、遊牧民に対して共産党の思想、社会主義思想を宣伝するという役割を担うとともに、モンゴル族への生活支援と文化的娯楽の提供という役割を果たしていた。しかし1960年代に入ると、土地改革や人民公社の建設など社会主義改造が進められる中で、次第に中央政府による上からの管理・統制が強化されていき、ウランムチも人民に奉仕する活動を通じて民衆に中国への帰属意識と社会主義思想を啓蒙する役割が強調されていった。停止期におけるウランムチの特徴としては、文革による政治的イデオロギーが前面に打ち出され、ウランムチは「毛沢東思想宣伝隊」として上演内容はすべて革命様板劇（革命模範劇）をモデルに歌詞や台詞が改変された。ウランムチのこのような役割の変化は、民族文化の固有性が政治体制により抑圧され、毛沢東思想に依拠した文化という前提でのみ民族文化の存続が図られたことの現れだといえる。文化大革命の収束後、中国は改革開放の時代を迎え、回復・改革期になる。この時期にウランムチの体制改革が行われ、大きな自由度が与えられた。ウランムチの創作は政治宣伝からモンゴル族の文化的特徴を表現した作品が創り出されるようになった。このことがモンゴル族の民族意識を大いに高揚する役割を果たしたと考える。ブランド化期には、ウランムチの活動は「文化と企業の連携」、「企業誘致資金導入方式」など市場経済に即した方法により展開され、民族文化の固有性をブランドとして商品化することで経済的利益を得ようとする手段に転換していった。とくに2000年代に入り、ウランムチの活動はローカルな地域文化を強調するようになった。政府が「内モンゴル自治区文化大地域建設綱要」を打ち出したことにより、各地域のウランムチは当該地域の民族文化の固有性や独自性を強調し、そのことで各地域の民族文化が再発見され、その民族性を強調することがさらに経済的利益につながるといふ循環が生まれていった。

以上のように、ウランムチの民族文化活動は国策に深く影響され、その時々において政策に順応しながらも、根底において民族性を保持しつつ文化を基盤とした少数民族としての帰属意識を涵養し続け、民族文化の継承を担う役割も果たしてきたといえる。

第三章では、モンゴル族のアンダイ文化を取り上げ、変動の激しい中国社会に対応する民衆

レベルでの対応について考察した。

伝統アンダイはもともとシャーマンによる呪術の一種であり、独特の節回しと踊りに特徴があり、紅白の衣装や飾りで華やかに舞う儀式であった。近代化が進む中で祭りの際に踊る文化として定着し、中国建国後も60年代頃まで一部で継承されていた。こうした伝統アンダイは共産党統治下で「封建迷信」と見なされ禁じられていったが、アンダイ芸術家たちは、アンダイ文化を中国社会に適用させ存続させるために新たな舞台アンダイを創作していこうとした。アンダイの創作者へのインタビューからは、アンダイの宗教的要素を捨て、新時代の新しい出来事を内容に盛り込み、中国社会に受容できる形で「新アンダイ」を生み出していったことが明らかとなった。アンダイ文化の保存・継承の観点から見れば、社会主義の思想に即して伝統文化から宗教的要素を排除し、踊りを中心にした娯楽としてアンダイ文化を再構築しながら、新アンダイとしてアンダイの伝統を受け継ぐ新たな形態として捉えようとしたことが分かる。

また、現代的に再構築された新アンダイについて、地域の人々はどのように考えているかをアンケート調査から明らかにした。アンケート調査では9割の人が「アンダイ芸術の郷の命名は地域の人々の自慢になる」と答えている。多数のモンゴル人はアンダイが「モンゴル文化の重要な一つである」、「モンゴル族の誇り」であると認識していることが明らかになった。

第四章では、民族文化の次世代への継承としてアンダイ体操が民族学校に導入されていることを踏まえ、学校教育を通じてモンゴル族の子どもたちが新たに創作されたアンダイ体操をどのように意識しているのかについて、民族学校の児童・生徒へのアンケート調査をもとに分析した。クロン旗で実施したアンケート調査を分析したところ、多くの児童生徒が「アンダイはモンゴル族の文化である」、「モンゴル族の文化を継承してほしい」という意識を持っており、学校でアンダイ体操をすることに肯定的な考えを示していた。第三章でのアンケート調査の結果と合わせれば、新アンダイは子どもたちにおいてもアンダイ文化として受容され、定着していることが明らかとなった。

第五章では、これまでの考察を踏まえて、課題3について検討を行った。

まず、中央政府から見た民族文化の意味、つまり民族文化の中華文化への包摂について、文化面における国民統合の過程を考察した。新中国成立期から文革期（1949年～1976年）における民族文化は、国民統合のために少数民族への融和政策として民族文化が尊重される一方で「政治・政策の宣伝」という役割を担っていることが鮮明であった。この時期の文化活動は、民族融和の精神を強調し、同時に文化芸術を通じて「革命精神」を宣伝する教化・宣伝としての役割が「人民に奉仕する」というスローガンの中に浸透していた。改革開放時期（1977年～2001

年)において、文化は単なる社会主義イデオロギーの教化ではなくなり、文化の多様性が認められるようになり、文化の価値が見いだされていった。地域や民族の固有性が国家により称揚され、帰属意識の強化にも影響を与えた。グローバル時代(2002~現在)に入ると、文化の価値は経済的価値としても着目され、経済建設を中心とした文化の振興が進められ、経済発展という物質的豊かさを通じて少数民族の国家への帰属意識が強化された。このことは、対外的にも中華文化のソフト・パワーとして強調され、民族文化の中華文化への包摂による中華民族としての帰属意識が強化された。「偉大なる中華民族の復興」というスローガンの下で少数民族を包摂した国民の文化向上によって、現在では新たな形で国民統合が進められようとしている。

次に、国家体制の中で少数民族がどのように文化を継承しているかを考察した。アンダイの事例を通じて明らかになったことは、民族文化の担い手自身によって創作された舞踊、劇、体操などの新アンダイは、民衆の間に広がり定着していることである。アンダイの様々な形態の変容はアンダイ文化を普及する一つ的手段と捉えられており、これは新しい文化の創造であるともいえる。伝統アンダイと新アンダイの共通点として、踊りの基礎部分にモンゴル族の祈り、祝詞、精神、宗教意識が込められている。伝統アンダイから新アンダイへの変容過程で、社会に柔軟に対応しつつ踊りの基礎部分が継承されていくことに大きな意義があると考えられる。すなわち、伝統の形を基本に据えながらもその時代に合わせながら、関わった人々の創造性が生かされて継承が行われている。伝統文化は多様化し変容していくが、その「モンゴルらしさ」を継承することによってモンゴル族としての民族意識は再生産され続けていくと考えられる。

以上より中国における少数民族は、国家と文化的利害において対峙しながらも、柔軟に妥協と適応を繰り返し、中華民族という上位概念における国家の共有文化になりながら、少数民族固有の文化でもあるという、国民意識と民族意識が異なる位相で両立しているものと考えられる。

#### 4. 本研究の成果

本研究の成果は、第一に、民族文化活動の変遷を国家レベル、地方レベル、民衆レベルの三層から構造的に明らかにした点である。国家レベルでは民族文化政策を跡付け、地方レベルでは官製の文化芸術団体の活動(ウランムチ)、民衆レベルでは日常的な文化活動(アンダイの新たな創造)から民族文化活動の変化を時系列ごとに検討した。これらの検討を通じて、中国の民族文化について国家的意図とそれを実体化する地方政府、そして民衆レベルでの意識を明らかにした。第二に、中国における民族の創出過程を踏まえつつ、国家と少数民族を二項対

立の構図でとらえるのではなく、中国の特殊な文脈において多元一体構造に依拠した両義的な帰属意識の醸成に少数民族の文化が位置づいていることを指摘した。第三に、少数民族が文化的な伝統を新たな創造的変容を経て継承している意義を考察したことである。本研究では、モンゴル族のアンダイを事例にしながらかつて文化は多様化し変容していきながらも、その「モンゴルらしさ」が継承されていることによって、モンゴル族としての民族意識が再生産されていることを示唆した。

残された課題として、まずモンゴル族のみを扱った点があげられる。新疆ウイグル自治区などほかの民族動向についても検証する必要がある。さらに民族学校での調査において、アンダイ体操のみを取り上げている点も不十分である。カリキュラムや教材を含め、多角的に民族学校での教育実践を検証し、子どもたちの民族意識と民族学校での教育の関連をより精緻に分析する必要がある。さらに付け加えるならば、「中華思想」をどうとらえるかという課題もある。「中華」という概念については多様な解釈があり、本研究が依拠した費孝通による多元一体構造論も批判的に検討する余地が残されている。

## 5. 主要参考文献

費孝通編著『中華民族の多元一体構造』風響社、2008年。

山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所、2007年。

劉源泉『中国共産党少数民族文化政策研究』人民出版社、2014年。

内蒙古自治区文化庁編『烏蘭牧騎之路—ウランムチ結成四十周年記念（1957～1997）』内蒙古人民出版社、1997年。

Салра 《 Уланмучи / Андай / Уланмучи 》, Уланмучи / Андай / Уланмучи, 2009 он. (サルラ 『アンダイ文化に関する論述』内モンゴル文化出版社、2009年)

---

<sup>1</sup> ウランムチはモンゴル族の民衆文化生活を活性化するために創設された基層文化事業機関である。内モンゴル自治区の住民が分散して居住している地域を中心に、各地を巡回上演する芸術団体である。現在、内モンゴル自治区に68団体あり、約30名前後の団員によって文芸公演が行われている。

<sup>2</sup> モンゴル族の伝統的な民間舞踊である。近年では、アンダイ劇、アンダイ体操といった形態に変化し、日常の中に定着している。アンダイ研究を代表するものに、内モンゴル大学のサルラによる『アンダイ文化に関する論述』（2009）がある。サルラは、アンダイを伝統アンダイと新アンダイに分け、1947年以前の伝統アンダイは、病気を治すシャーマニズムの儀式である。今日の新アンダイとは、儀式的側面が弱まり、芸術の形式で発展したアンダイである。